

藝大

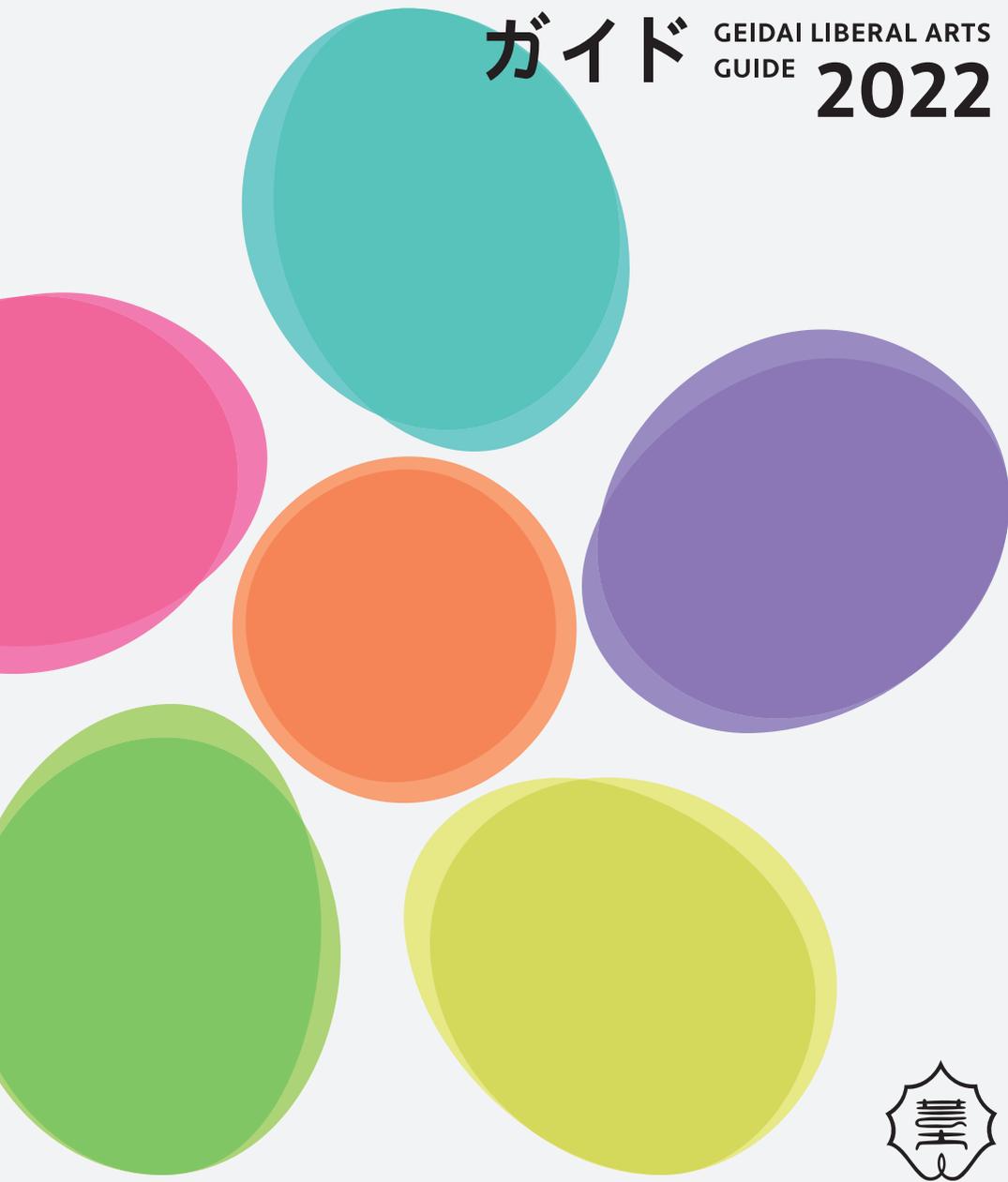
教養科目

リベラルアーツ

ガイド

GEIDAI LIBERAL ARTS
GUIDE

2022



TOKYO GEIDAI

藝大  教養科目
リベラルアーツ
ガイド GEIDAI LIBERAL ARTS
GUIDE 2022

藝大^{いざな}リベラルアーツへの誘い

東京藝術大学で学ぶことの根幹が、入学時より専門教育（実技・研究等）にあることは言うまでもありません。それを支える授業主体の科目は、広い意味では語学も含めて全て「教養科目」と言えましょう。そこから専門教育の基礎となる「専門基礎科目」と、専攻の枠を超えて様々なジャンルにわたり、人間と文化を総合的に捉える視点を育てる「（一般）教養科目」とに分かれています。この『藝大リベラルアーツ（教養科目）ガイド』は、後者について開設科目の内容を簡便に記載し、その全体像を鳥瞰できるようにすることを目的として編集されました。

「リベラルアーツ」とは「一般教養」と訳されますが、本来の意味は「人間を自由にする技」とも言えるでしょう。具体的には、人文科学・自然科学等の基礎分野を横断的に学べる教育プログラムのことです。本学でも多くの科目が開設されていますが、内容は多岐にわたり、その全体像を把握するのは容易ではありません。

そこで、本冊子ではそれらを5つのテーマ（芸術の広がりを知る・次の時代の知識を得る・教養を磨く・社会と共創する・デジタルの表現をみにつける）に分類してあります。これはあくまでもみなさんが選択しやすくするための指針であり、実際には5つのテーマが相互に関連し合う科目群です。なお、科目によっては扱う内容から、音楽学部のみ又は美術学部のみを学生を対象とする科目がありますので注意して下さい。

異分野融合という言葉が良く聞かれます。またビジネス界でも、アーティスト的思考（アート・シンキング）が新たなイノベーションを生む、とも言われています。このように、世の中の「アート」に対する意識変化が見られる昨今、これからの芸術家は対社会ということを常に意識しなければ活動してゆくのは困難であると思われます。そのためにも自分の専門領域外に広く知識を求めてゆくことによって、新しい考え方や多様な発想を作品・演奏・研究等に活かし、21世紀をリードする芸術家に育ってゆくことを願っています。

ぜひこの小冊子を活用し、みなさんにとっての「リベラルアーツ」の在り方を探求して下さい。

令和4年3月
東京藝術大学理事（教育担当）
安良岡章夫

藝大リベラルアーツ（教養科目）ガイドの使い方

藝大には、ほかの大学と比べても多岐にわたる教養科目の授業が揃っています。

みなさんにとっての教養の源泉となる学びの体験から、幅広い分野の芸術や創作、その思索やノウハウを獲得できる授業、さらには仮想空間やゲームといったデジタル表現や著作権、社会の諸課題といったこれからの時代で活躍するためのアップデートとなる実践的な経験を得られる機会までもが、それぞれの分野の第一線にある先生から得ることができます。

本ガイドでは5つのテーマを設定して、そんな幅広い教養科目から学びたい授業を選ぶサポートにしました。



この5つのテーマを花びらに喩え、藝大リベラルアーツをひとつの花に象ってみました。

それぞれのテーマをコーナーにして、ガイドでは掲載しています。次のページには、すべての教養科目を一覧する目次を掲載しています。

知りたい、身につけたい、リベラルアーツの学びに、みなさんが出合えることを期待しています。

ガイド活用のための注意

- 1：本ガイドに掲載されている教養科目は、それぞれ所属学部などの対象者が設定されています。
 - 2：2022年2月時点の内容のため、以降に変更がある場合があります。
- ～履修に関するくわしい内容は、最新状況が反映される、オンラインのシラバスを参照してください。

INDEX

テーマ

● 教養を磨く ● 次の時代の知識を得る ● 芸術の広がりを知る ● 社会と共創する ● デジタルの表現をみにつける

No.	テーマ	科目・コンテンツ	ページ
-		藝大リベラルアーツへの誘い	2
-		ガイドの使い方	3
-		INDEX	4
1	● 次の時代の知識を得る	先端知を識る 異分野横断オムニバス講座	6
2	● 社会と共創する	アーティストのためのダイバーシティ&インクルージョン入門	8
3	● 芸術の広がりを知る	アーカイブ概論	10
4	● 芸術の広がりを知る	映像演習Ⅱ アニメーション	
5	● 芸術の広がりを知る	演奏身体論Ⅰ・Ⅱ	11
6	● 芸術の広がりを知る	応用音楽学入門Ⅰ・Ⅱ	
7	● 芸術の広がりを知る	音楽文化史Ⅰ・Ⅱ	12
8	● 芸術の広がりを知る	音響学Ⅰ・Ⅱ	
9	● 芸術の広がりを知る	音声学Ⅰ・Ⅱ	13
10	● 芸術の広がりを知る	芸術史	
11	● 芸術の広がりを知る	芸術と情報	14
12	● 芸術の広がりを知る	現代芸術概説	
13	● 芸術の広がりを知る	創造と継承とアーカイブ：領域横断的思考実践	15
14	● 芸術の広がりを知る	バレエ史Ⅰ・Ⅱ	
15	● 芸術の広がりを知る	美学Ⅰ・Ⅱ	16
16	● 芸術の広がりを知る	ポップ論Ⅰ・Ⅱ	
17	● 芸術の広がりを知る	メディア特論	17
-		コラム：卒業生が綴る藝大教養授業 大竹寛子	18
18	● 次の時代の知識を得る	芸術情報リテラシー概論	19
19	● 次の時代の知識を得る	環境と防災の科学	
20	● 次の時代の知識を得る	情報メディア学	20
21	● 次の時代の知識を得る	創作活動に必要な心理学の基礎知識	
22	● 次の時代の知識を得る	創作のための認知科学	21
23	● 次の時代の知識を得る	著作権概論Ⅰ・Ⅱ	
24	● 次の時代の知識を得る	メディア・リテラシー	22
25	● 次の時代の知識を得る	メディア論Ⅰ・Ⅱ	
-		コラム：卒業生が綴る藝大教養授業 布施英利	23
26	● 教養を磨く	イタリア文学Ⅰ・Ⅱ	24

No.	テーマ	科目・コンテンツ	ページ
27	● 教養を磨く	英米文学Ⅰ・Ⅱ	24
28	● 教養を磨く	憲法	25
29	● 教養を磨く	思想史Ⅰ・Ⅱ	
30	● 教養を磨く	社会学	26
31	● 教養を磨く	宗教学	
32	● 教養を磨く	心理学概説Ⅰ・Ⅱ	27
33	● 教養を磨く	生物学Ⅰ・Ⅱ	
34	● 教養を磨く	ドイツ文学Ⅰ・Ⅱ	28
35	● 教養を磨く	フランス文学Ⅰ・Ⅱ	
36	● 教養を磨く	文化人類学Ⅰ・Ⅱ	29
37	● 教養を磨く	法学（含日本国憲法）	
38	● 教養を磨く	歴史Ⅰ・Ⅱ	30
39	● 教養を磨く	倫理学Ⅰ・Ⅱ	
-		コラム：卒業生が綴る藝大教養授業 藤原道山	31
40	● 社会と共創する	音楽アウトリーチⅠ・Ⅱ	32
41	● 社会と共創する	音楽教育入門	
42	● 社会と共創する	音楽療法入門Ⅰ・Ⅱ	33
43	● 社会と共創する	音楽療法概論Ⅰ・Ⅱ	
44	● 社会と共創する	芸術と社会 21世紀の社会が求める創造性とは（企業編）	34
45	● 社会と共創する	芸術文化環境論Ⅰ・Ⅱ	
46	● 社会と共創する	「障がいとアーツ」研究	35
47	● 社会と共創する	芸術情報概論A・B	
48	● 社会と共創する	DOOR「アート×福祉」をテーマに社会人と一緒に学ぶプログラム	36
49	● 社会と共創する	日本の芸術・文化を英語で学ぶ	38
-		コラム：卒業生が綴る藝大教養授業 坂東祐大	39
50	● デジタルの表現をみにつける	イメージ演習A	40
51	● デジタルの表現をみにつける	イメージ演習B	
52	● デジタルの表現をみにつける	インタラクティブ・ミュージックⅠ	41
53	● デジタルの表現をみにつける	映像演習Ⅰ 映画	
54	● デジタルの表現をみにつける	芸術情報演習Ⅰ	42
55	● デジタルの表現をみにつける	芸術情報演習Ⅱ	
56	● デジタルの表現をみにつける	ゲーム制作演習1・2	43
57	● デジタルの表現をみにつける	コードとデザイン	
58	● デジタルの表現をみにつける	デジタル・サウンド演習	
59	● デジタルの表現をみにつける	メディアアート・プログラミングⅠ・Ⅱ	

教養教育センター発・リベラルアーツ企画授業

常に時代とともに在り続けなければならない表現者となる藝大生に対して、各分野の先端知を担い、新たな科学を切りひらいてきたフロントランナーの先生から直接学べる授業を、教養教育センター独自に今年度から開設しました。宇宙の彼方から、私たちの体内、経済市場まで、根源に迫る授業です。

1

次の時代の知識を得る

先端知を識る 異分野横断オムニバス講座

授業を行う先生：谷口維紹、御立尚資、戸谷友則、田中昌司、安良岡章夫、岡田智博

開講時期・時間：前期 水曜日 4時限

科学の発展は私たちに様々な可能性と影響をもたらしています。人類として新たなウイルスの脅威にさらされ、先端技術によってまったく新たな手段で立ち向かう現在進行中のいまは、その好例ということができるでしょう。芸術もまた、様々な知性を駆使して、みなさん一人ひとりの手によってつくられ、発展していきます。

本授業は、私たちにとっての知的可能性を拡張できるように、免疫学、脳科学、天文学、経済学といった各分野の科学をリードする高名な方を講師に招いて行います。領域を切りひらいている講師が直接みなさんに講義することで、異なる分野の先端知にライブで触れられます。そのことを通じて、創作者としてより視野を拡げ、新しい発想につなげられることを期待しています。

本授業は、特別な事態がない限り、識るためのライブを重んじて、対面にて開催します。

各講師による授業内容の紹介

谷口維紹 分子免疫学者

東京大学名誉教授・東京大学先端科学技術研究センターフェロー

免疫の仕組み：科学と芸術、そして私たちのこれから

私たちの身体を感染やがんなどから守る免疫の仕組みについてわかりやすく解説します。特にコロナ禍でワクチンなどが大きな話題になりましたので、みなさんの多くは免疫についての関心が増大しているのではないかと思います。

免疫についての記載は歴史が古く、遡れば紀元前にもその記述らしいものが見当たります。学問としての免疫学はエドワード・ジェンナーによる天然痘の予防法の開発に端を発し、やがてルイ・パスツールによる免疫現象の科学的解析へと進んでいきます。パスツールやロベルト・コッホによって「微生物の感染によってヒトが病気になる」ことが示され、免疫学の基礎が築かれていったのです。その後、この分野は大きく展開してきましたが、まだわからないことも多く残されています。

授業では、免疫学の歴史から始まり、外来の病原体や分子に対してどのような仕組みで抗体ができるのか、といった仕組みなどについてできるだけわかりやすく説明します。

また、免疫とがんの関係や、アレルギーなどの「不都合な免疫応答」についても解説します。

科学と芸術はどういう関係にあるのでしょうか？ 所詮、芸術は科学の対象にはならないのでしょうか？ また、これからの人間社会において科学と芸術の在り方はどうあるべきなのでしょうか？ 授業では、これらについてもみなさんと一緒に考えたいと思います。

御立尚資 経営学者

京都大学経営管理大学院特別教授・大原美術館理事

ボストン コンサルティング グループ 元日本代表

巨視的な時代認識：パラダイムの変化を俯瞰し把握する

時代環境と芸術には、強い関係があります。受容の対象としてであれ、反発あるいは乗り越えるべき対象としてであれ、時代の変化とそれに伴うエトスは、音楽、絵画、映像、造形、様々な芸術分野に影響を与えてきました。

19世紀からの産業革命は、それまでの社会とまったく異なる様相を見せました。それがいま、さらに異なるパラダイムに移行しようとしています。

本授業では、講義と対話を通じて、この大きな変化を把握し、みなさん自身が表現活動などに活用できる状態になることを目指します。

戸谷友則 宇宙物理学者

東京大学大学院理学系研究科天文学専攻教授

ビッグバンから生命誕生まで：宇宙のドラマを科学する

本講義では、宇宙の歴史と成り立ち、様々な天体現象、そしてそのなかで生命がどう誕生したのか、といった話題を、最新の天文学の知見に基づいて解説します。

宇宙や、最新の天文学に関する基礎的な知識と教養を身につけてもらい、宇宙と生命について思いを馳せる機会としてほしいです。

われわれは何者で、どこから来たのか？ これは人類にとって最も根源的な謎であり、未解明の部分も多いのですが、最先端の科学がどこまで迫っているのか、感じ取ってほしいと思います。

田中昌司 脳科学者

上智大学教授

脳科学と音楽・演劇

脳はもうひとつの宇宙であるといわれます。脳科学は人間がすることすべてを対象とするサイエンスです。

本講義では、脳の基本的な構造や機能の説明をした後、音楽や演劇に関連する最近の脳科学研究を紹介いたします。

私は脳がどのようにはたらいて音楽や演劇をするのかを知りたくて、音楽家や俳優の方々の脳を研究しています。研究しながら、芸術活動を行うみなさんにこそ脳のはたらきを知っていただきたいと思うようになりました。

私が講義でお話することは、みなさん自身の脳のはたらきでもあるのです。脳を知ることで、みなさんの芸術が変わるのか変わらないのか (To be, or not to be)、それが問題です。

教養教育センター発・リベラルアーツ企画授業

アートを通じて社会を切りひらく可能性を持っている藝大生が、世界的な視野を涵養できるよう、グローバルサポートセンターとの共同授業を今年度から開設しました。これから社会で表現し、活躍するために必要とされる「多様性=ダイバーシティ」「受容=インクルージョン」を、第一線で活動する多彩な講師から学びます。

2

社会と共創する

アーティストのためのダイバーシティ&インクルージョン入門

授業を行う先生：毛利嘉孝、上野千鶴子、ケイン樹里安、出口真紀子、中村美亜 ほか

開講時期・時間：後期 月曜日 6時限

今日、美術や音楽の分野で活動するアーティストや研究者は、国境を越えてグローバルに活動し、多様なバックグラウンドを持つ人々と交流するためのスキルが求められています。そこで重要になるのがダイバーシティとインクルージョンの考え方です。

自分にとっての当たり前が、他の人にとっては当たり前ではないと知る。そしてその違いについて考えることで、世界の広さと豊かさに気づき、自身と他者をより深く理解する——、それがこの授業の目的です。

例えば高校卒業後に大学に行くこと。日本語を話すこと。生まれたときと同じ性別をいまも名乗っていること。国内化粧品メーカーのファンデーションの色がだいたい合うこと。エレベーターのない駅でも一人で電車に乗れること。これらは誰にとっても「当たり前」のことではありません。

近年広まっている、「多様性=ダイバーシティ」と「受容=インクルージョン」という言葉は、グローバル化した現代社会で、障がいの有無、国籍、性別・性自認・性的指向、人種、信仰、民族、年齢、言語、文化、ライフスタイルなどが違う人同士が、お互いの特性を尊重しながら共存するために必要な考え方です。

この授業では、「マジョリティとマイノリティ」「ジェンダーとセクシュアリティ」「人種とエスニシティ」などのカテゴリーを設け、それぞれにおける多様性の受容について専門家が講義を行います。受講者のみなさんは、属性や背景などの違いから生まれる誤解や偏見、差別、社会排除などの問題について学び、どうすればそれらを解決できるのかを考えます。

有名なディズニー作品のヒロインが白人から黒人に変わることは、これまで自分と似た姿形の主人公を映画館やテレビで見たことがなかった有色人種の子どもたちにとってどんな影響があるのか？ 国会議員に女性が増えると、その国の政治や経済にどのような変化が生まれるのか？ オリンピックやパラリンピックにトランスジェンダーのアス

リートが出場すると、スポーツの裾野はどう広がるのか？ 他国の民族衣装を着たり、他国の伝統文化を自分の作品に取り入れたりするときに、最低限知っておくべき知識とは？ 平等と公平の違いとは何か？

このような問題について考えることは、新たな価値を社会に問う芸術の実践にとって大事なことです。自分の創作物や表現、研究が発するメッセージが、現代社会にどのような影響を与えるか、とりわけ自分とは背景が異なる人々にどう受け止められるかについて、想像力を働かせる必要があります。

この授業を通して、自分にとっての当たり前という固定観念から一歩外に出て、他者や世界との関係をより広い視野で捉えるきっかけをつかんでもらえたら幸いです。

グローバルサポートセンター

全学生を対象に、グローバル化する社会を多角的に学べる特別講義を開講中！

※本特別講義は履修外の企画です。

より現在の世界を知り、グローバルにつながりたい学生に向けて、特別講義シリーズ「グローバルアーティストのためのリベラルアーツ」を全学対象に通年で開講中。

グローバル化を迎えた社会の最新動向と、それを理解するために必要な知識や教養を、各界の専門家・識者による講義を通して学ぶ機会を提供しています。自分自身はどのような時代に生きているのか。芸術家として生きていくためには、多様な社会、政治、文化、過去から現代、未来に至るまでの深い造詣が必要です。

以下の3つのカテゴリーを基本に、各回異なるテーマを設け、様々なゲストを招いた特別講義を企画しています。

- 1) ダイバーシティ&インクルージョン：文化、人種、言語、性別、宗教などの多様な背景や価値観を持つ人々とともに芸術活動・研究活動を行う際、必要となる教養の講義シリーズ。
- 2) 時事・国際社会：国際情勢や政治問題など、グローバル化する社会で芸術活動・研究活動を行う際、必要となる一般教養の講義シリーズ。
- 3) アジア・アート・イニシアティブ事業《シリーズ：アジアの文化芸術》：「アジアの文化芸術」をテーマとした講義シリーズ。

大学ウェブサイト「GEIDAI x GLOBAL」の「語学・国際教育>講座」ページに詳しい内容・参加方法を掲載しています。<https://global.geidai.ac.jp/study/>

3 芸術の広がりを知る アーカイブ概論

授業を行う先生：上崎千、西澤徹夫、嘉村哲郎
開講時期・時間：前期 火曜日 3時限

アーカイブとは何か。いかにしてアーカイブは可能となるのか。アーカイブは何と異なり、何とどう似ているのか。システムとしての言語（言語化の諸可能性）と物理的なマテリアルの集成（corpus）とのあいだで実現されるカルトグラフィを、芸術学の範疇において捉え直します。

芸術を構成している様々な事象〈アーカイブ〉に向けての問いを投げかける本授業の射程には、アーカイブという知の在り方そのものを駆動させている技術への関心が含まれています。

本授業では、アーカイブ理論、建築学、情報学を専門とする3人の教員の視点から、アーカイブをめぐる様々な問いと「芸術作品とは何か」という根源的な問いとの接続を、講義・講読・討論を通して試みていきます。

4 芸術の広がりを知る 映像演習Ⅱ アニメーション

授業を行う先生：布山タルト、伊藤有壺、山村浩二、岡本美津子、牧奈歩美
開講時期・時間：後期 水曜日 5時限

アニメーションは、ダイナミックにその形を変えながら様々な領域へと浸透する大きな可能性を持った表現です。

この授業ではその可能性と多様性、それを基礎づける思考や技術、社会とのつながりなどについて、異なる専門性を持つ教員陣がオムニバス形式で紹介합니다。

授業では、歴史や地域を横断して多数のアニメーション作品を紹介するとともに、一部、ワークショップ形式の演習なども交えながら、アニメーション表現を俯瞰的に理解していきます。この授業を入り口として、みなさん自身の制作や研究にアニメーションを積極的に取り入れ、その実践を深めていってほしいと願っています。

5 芸術の広がりを知る 演奏身体論Ⅰ（前期）・Ⅱ（後期）

授業を行う先生：福富祥子
開講時期・時間：前期（Ⅰ）・後期（Ⅱ） 金曜日 3時限

この授業の大事なテーマは、「身体の動き」と「音楽表現」をつなぐということです。思いどおりに演奏するために「自分の身体がもっと自由に動いてくれたら」と、もどかしく感じた経験は誰しもあるのではないのでしょうか。では、思いのままに表現するための「動き」をどのように見つければ良いのか。そのためにこの授業で最も大切にするのは、「自分の身体に気づく」ということ。

知っているようで意外と知らない自分の身体。身体に気づくことは、実は、自分がどのように考え、どのように表現したいと思っているのか？という、自分の心の動きに気づくことともつながっています。そして、身体感覚を深めると同時に、演奏者・教育者として不可欠なりテラシーとなる身体の仕組みや運動機能についての理解も深めていきます。

6 芸術の広がりを知る 応用音楽学入門Ⅰ（前期）・Ⅱ（後期）

授業を行う先生：畑瞬一郎
開講時期・時間：前期（Ⅰ）・後期（Ⅱ） 水曜日 3時限

音楽とは何であるのか。音楽はどこから生まれてくるのか。音楽は知性とどのような関係があるのか。

音楽をめぐる根本的な問いを考え始めると、ただ迷宮へとはまり込んでしまうものかもしれません。それでも、様々な手掛かりから「考える」ことは可能でしょう。

この授業に「答え」はありません。開かれた「問い」だけがあります。認知心理学者ハワード・ガードナーの「多重知性理論」、ロランド・ベネンソンの「ISO理論」に加え、近年の脳科学がもたらした成果や乳幼児・障害児の音楽教育の現場をヒントにしながら、それぞれの音楽体験を問い直すことを試みます。音楽そのものが知性であり教養であることを認識し、理解することを目指しています。

7

芸術の広がりを知る

音楽文化史Ⅰ（前期）・Ⅱ（後期）

授業を行う先生：館亜里沙

開講時期・時間：前期（Ⅰ）・後期（Ⅱ） 月曜日 4時限

私たちの親しむ音楽文化の中では、様々な「音楽」の定義が存在しています。

本授業ではその多種多様な音楽の価値観が生まれた歴史を、とりわけ西洋音楽とそれを取り巻く社会に焦点を当てて概観します。過去の音楽を知ることで、あらためて現代の音楽文化を考察するというのが到達点です。

前期は主として講義形式で授業を行い、中世から近代までの西洋音楽史を概説します。

後期は主として演習形式で授業を行い、音楽環境創造科の学生が携わることの多い現代音楽をテーマとして扱います。

8

芸術の広がりを知る

音響学Ⅰ（前期）・Ⅱ（後期）

授業を行う先生：渡邊祐子

開講時期・時間：前期（Ⅰ）・後期（Ⅱ） 水曜日 2時限

“音”とは、私たちの生活環境に存在し、私たちの生活を“豊か”にも“不快”にもする重要な環境パラメータです。

前期の音響学Ⅰでは、音を扱う学問（音響学）の歴史と変遷を概説したあと、音の物理的特性として音の発生、音波の伝搬などが地球の物理法則に基づいていることを解説します。一方で、ヒトは聴覚（耳）を通して音を知覚します。その機能（生理）や感覚的性質（心理）についても解説します。

後期の音響学Ⅱでは、音響学に含まれる様々な分野や技術、例えばデジタルオーディオ、音声、3D音響、サウンドマップなどの解説や最新のトピック紹介を通して、音に関する知識を深めることを試みます。

9

芸術の広がりを知る

音声学Ⅰ（前期）・Ⅱ（後期）

授業を行う先生：三枝英人

開講時期・時間：前期（Ⅰ）・後期（Ⅱ） 水曜日 1時限

歌ったり、ことばをしゃべったり、楽器を演奏したり、そして芸術を創造するのはヒトのみが行う行動です。

音声学という硬いイメージですが、この授業では、音楽という特異な行動を行うヒト自身の成り立ち、それをさらに生命の成り立ちから、例えば音楽を行う身体姿勢がなぜ歌声や器楽演奏に大事なのか、呼吸とは何か、ピッチの調節や発音はいかに行われるべきかなどを考えていきます。ですので、(芸術として、もしくは創造的な)音(と)声(について)学び、考える講座ということになります。朝いちばんの授業なので、パンをかじりながら気軽に、頭を柔軟にして受講してください。

10

芸術の広がりを知る

芸術史

授業を行う先生：木方幹人

開講時期・時間：前期 月曜日 5時限

この社会において様々なメディアで、「芸術」（同義語としては「アート」）という言葉が多様な場面で使用されています。では、その「芸術」の意味を調べてみると、それは近代以降に形成されたものであるとだけ、しばしば説明されています。

しかし、現実にはそれが何を意味するのか。この芸術史の授業は、いかに「芸術」という言葉が「近代」の成り立ちとともに、具体的に普遍性を帯びて成立してきたかを講じます。この近年を振り返っても、芸術を取り巻く環境は目まぐるしく変化し、つかみどころがないように見えますが、近代思想の一環としての「芸術」を理解しておけば、不要な議論に巻き込まれることなく、各学生が目指す分野・方向性に邁進することができますようになります。

11 芸術の広がりを知る 芸術と情報

授業を行う先生：桐山孝司

開講時期・時間：後期 水曜日 5時限

創作活動における情報技術の役割を意識し、必要に応じて活用できるようになることが、求められるようになっていきます。目に見えない部分で現代社会を動かしている情報技術の仕組みにも、注意を向けることが重要です。

この授業では、創作活動を行っていく上で有用な情報技術の理解を深めることができます。また、授業内では、映像作品に触れる機会を作り、観ておくべき古典的な映像作品を紹介します。11～12月には、大学院映像研究科ゲームコースと連動して、「ファイナルファンタジー XV」を製作した Square Enix/Luminous Productions のアーティストらによるゲスト講義を行います。

12 芸術の広がりを知る 現代芸術概説

授業を行う先生：福住廉

開講時期・時間：後期 木曜日 5時限

現代芸術を現代美術にしぼり、その歴史や構造、関係など基本的な知識を提供します。画像や動画をもとにわかりやすく解説するので、現代美術をより専門的に学びたい学生にとっても、教養のひとつとして現代美術に親しみたい学生にとっても、絶好の第一歩となるでしょう。

オンラインの収録型の授業になりますが、授業内で紹介した著作や作品集を図書館で探し出したり、展覧会を鑑賞しに行ったり、授業後の自発的な行動が学習効果をよりいっそう高めると考えています。

13 芸術の広がりを知る 創造と継承とアーカイヴ：領域横断的思考実践

授業を行う先生：李美那、平論一郎

開講時期・時間：通年 木曜日 ※不規則日開講 18:00～19:30

年間15回、木曜日の18時から90分間の、ズームによるオンライン授業です。学部・院、専攻を問わず、誰でも受講できます。日英の同時通訳が入るので、日本語が第一言語でない方もぜひ参加してください。

自然、身体、再生・再現、行為、音、建造物、データなど、多分野のゲストの授業を、アーカイヴというキーワードでダイナミックにつなげます。思考回路を領域横断的に駆動させて、アートが生まれる社会の幅広い知を、貪欲に自ら読み解く力を鍛えることを目指す授業です。そのため、授業後半では、李と平がゲストの話を読み解きながら、受講生からのコメントを取り入れて積極的にディスカッションの場を作ります。待ちではなく攻めの姿勢で臨んでください！

14 芸術の広がりを知る バレエ史Ⅰ（前期）・Ⅱ（後期）

授業を行う先生：川島京子

開講時期・時間：前期（Ⅰ）・後期（Ⅱ） 火曜日 3時限

バレエはイタリアで生まれ、フランスで育ち、ロシアで花開いたといわれます。さらに20世紀になると、このロシア・バレエがロシア革命によって全世界へと伝播してゆきます。

授業では、こうしたバレエ史の通史を押さえつつ、それぞれの時代の作品の特徴について学びます。バレエ芸術の基礎から文化的・政治的コンテクスト、ほかの芸術ジャンルとのつながりなど、広い視野からのアプローチの中でたくさんの発見をしていただき、みなさん自身の表現につなげていってほしいと思っています。

前期の「バレエ史Ⅰ」では、舞踊の起源から19世紀のロシアのクラシック・バレエまで、後期の「バレエ史Ⅱ」では、20世紀のバレエ・リュスから現代までのバレエを学びます。

15

芸術の広がりを知る

美学Ⅰ（前期）・Ⅱ（後期）

授業を行う先生：吉田寛

開講時期・時間：前期（Ⅰ）・後期（Ⅱ） 水曜日 5時限

美学は、感覚や感性について考える学問です。

英語ではエスティックスといいますが、この語は、感覚や感じることを指すギリシャ語のアイステーシスに由来します。感性と美と芸術が、美学の三つの主要な関心領域です。美学はよく芸術学や芸術理論と混同されますが、芸術は美学の対象の一部にすぎません。

芸術の制作や鑑賞はもちろんのこと、日常生活のあらゆる場面で、われわれは五感を通して世界を感知しています。思考や感情はすべて感覚や感性と結びついています。身体や感覚は、われわれに属するものというより、われわれと世界の境界です。その境界の在り方や働きについて考えるのが美学なのです。

この授業では、芸術だけでなく様々な身近な事象を扱いながら、感性について考えます。

16

芸術の広がりを知る

ポップ論Ⅰ（前期）・Ⅱ（後期）

授業を行う先生：桜井圭介

開講時期・時間：前期（Ⅰ）・後期（Ⅱ） 水曜日 5時限

ほんの100年ちょっと前に始まったユース・カルチャー、それ以前には社会を回している「大人」が独占していた文化（主流の／規範的な／メジャーな）に対して起こった、コドモのコドモによるコドモのためのカルチャーについて見ていきます。

ここでいう「コドモ」とは、「(例えばアメリカ合衆国における)非白人」「女性」「同性愛者」など、様々な意味における「マイノリティ」のことでもあるでしょう。

具体的な足掛かりとして、アメリカン・ポップ・ミュージック史、日本社会の転換期＝1980年前後のポップ・カルチャー全般を概観していきます。どちらも、遠い過去の話に思えるかもしれませんが、僕たちの現在のポップ・カルチャーの起点であり参照点だと思うのです。

17

芸術の広がりを知る

メディア特論

授業を行う先生：亀川徹、牛島大悟

開講時期・時間：前期（Ⅰ）・後期（Ⅱ） 水曜日 6時限

芸術情報センター（AMC）では、その時代の第一線で活躍しているゲストの方々を招いた講演および授業を行ってまいりました。

この授業では、様々な分野のトップ研究者・表現者を迎えて、ゲスト講師の講演およびトーク形式の講義を行います。授業は前・後期を通じて隔週で行い、オンラインにて受講できます。

創作活動において、様々な専門領域の研究や最先端の発想を知ることが非常に重要です。自分の専門領域だけでなく、その専門性を軸に多分野についても幅広い見識を持つことで、より強い表現力を身につけることができます。また、毎回の授業に参加して多様な側面から考えることで、この授業がきっかけとなり新しい表現や発想につながることを期待しています。

COLUMN 卒業生が綴る藝大教養授業

アーティストとしての扉を開いた教養授業

大竹寛子 2006年美術学部絵画科日本画専攻卒業・2011年美術研究科博士課程日本画研究領域修了・美術研究博士号取得
画家

私は入学するため4年間浪人したということもあり、大学の全てを吸収したいという気持ちが強く、専攻の日本画実技の授業とともに、教養課程のみならず、貪欲にも教職や博物館学課程の授業を受け、教員免許、学芸員の資格も取得しました。建築の授業や哲学、芸術論や美学、英語の授業、そしてフランス語、イタリア語などの授業にも参加して、大学の長い休みにはフランスやイタリアに旅行し、現地で覚えたての言葉を交わしていた思い出があります。

卒業単位にならないものが授業の中にはありますが、私は必要な単位に関係なく、面白そうな授業には出席していました。

その中でも特に印象に残っているのは、茂木健一郎先生の「生物学特別講義」です。

それは、現代アーティストの荒川修作さん、大竹伸朗さん、束芋さん、哲学者の塩谷賢さんなど幅広いジャンルで現在活躍されている方々と茂木先生による対談形式によるもので、受講生とも積極的に質問を交わす、本当にドキドキするような熱い授業でした。授業の後には決まって、上野公園の中にある小さな公園で飲み会があり、授業をしていただいた方と間近でフランクに話をさせていただくことができました。

そんな縁から茂木先生には、日本画科の研究室での特別演習ゼミの企画として、私たち日本画第一研究室の作品発表の講評をしていただき、日々の専門とはまた違った講義はとて勉強になりました。また、その際に私が提出した作品『完全変態』が茂木先生の『今、ここからすべての場所へ』というエッセイ本の表紙の装丁に起用されたことが、自分の作品が世の中に出ていく大きなきっかけになりました。これらの経験から、作品への自信と一筆の責任感をリアルに感じることができました。

今でも茂木先生や講義に来て下さった先生、また授業に参加していた様々な学科の学友との交流は続き、現在の私の活動の大きな糧になっています。

18

次の時代の知識を得る

芸術情報リテラシー概論

授業を行う先生：我妻潤子

開講時期・時間：前期 金曜日 3時限

著作権や知的財産権は、創作者である権利者が自分の作品（著作物）をどう扱ってほしいのかということが主張できる権利です。「作って終わり」にしないためにも権利に対する考え方を身につけ、自分自身で作品をどう提供するのかわかる機会を提供できればと思っています。

この授業では確実な「答え」はありません。考えるための法律的な知識の提供はしません。でも、答えを出すのは受講生のみなさんです。

基本的には、オンデマンド授業（授業映像を見てもらう）にしたいと思います。ただ、質問や意見交換もあるでしょうから、授業の冒頭30分程度や随時、Google Meet（もしくはZoom）またはチャットを利用した授業を行いたいと思います。

19

次の時代の知識を得る

環境と防災の科学

授業を行う先生：桐野文良

開講時期・時間：前期 水曜日 5時限

芸術家自らの安全の確保から、お客様が安心して芸術を鑑賞できる環境づくりまでができる、一味違う幅広い教養を持った芸術家の養成を目指します。この目標は、故六角鬼丈・元美術学部長の願いのこもった科目であり、今年で13年目になります。

本授業では、自らの安全を確保するには？に始まり、周囲への安全配慮、さらには自然災害などから身を守る防災科学へと進んでいきます。また、自然環境を守り後世に伝えるには？といった疑問を投げかけ、受講者全員で考えていくゼミ形式で進めます。最後はSDGsにも触れ、今後は展望いたします。

幅広い内容をカバーしているので、教科書などは指定せず教員が資料を用意いたします。この授業は、講義部分と実技部分（防災訓練や救急救命訓練）とから成っています。これまで美術、音楽の両学部からの受講があり、毎年5～12名で授業を進めてきました。新型コロナウイルスの感染状況にもよりますが、講義中には必ず発言するような受講者の積極的な参加を待っています。

20 次の時代の知識を得る 情報メディア学

授業を行う先生：嘉村哲郎、中村美恵子
開講時期・時間：前期 月曜日 4時限

私たちの身の回りにある様々な情報ツールの利用方法について学びます。メールやクラウドの利用など、基礎的な内容から専門的な内容まで幅広く解説します。

現代社会において誰もが知っておくべき情報リテラシーとして、Microsoft Officeの利用方法については基礎から応用まで、実際に機器を操作しながら身につけていきます。また、インターネットを利用する上で必須の知識となっている、情報セキュリティや著作権についても学びます。

各回において、実習形式、講義形式を取ります。課題が出される場合もあります。高度化された現代の情報社会において情報機器を扱う上での、基本リテラシーとセキュリティ意識を身につけることを目指します。

21 次の時代の知識を得る 創作活動に必要な心理学の基礎知識

授業を行う先生：大谷智子
開講時期・時間：前期 金曜日 3時限

表現する、デザインする、鑑賞することは、人間の存在を無視することができない行為です。心理学は、人間そのものを科学的に解明しようと研究している学問です。

この授業では、心理学の知見によって、日常生活で何気なくやっている行為や創作活動における表現を見詰め直すことができます。授業の目的は、知覚・認知・発達・社会・臨床心理学の基礎的な知見を身につけ、表現の幅を広げることです。芸術作品などにも利用される人間の感覚特性については、講義内で体験しながら学びます。

授業で取り上げたテーマについて、日々の経験とどのように結びついているのか、具体的に考える機会を作り、より学びが深まることを期待しています。

22 次の時代の知識を得る 創作のための認知科学

授業を行う先生：大谷智子、磯谷悠子
開講時期・時間：後期 金曜日 3時限

この授業では、人間にとっての意識・感情・行動の関係を理解し、認知科学に関する理解を深めることを目的としています。

人間は、知覚・注意・学習・記憶・推理など多くの認知機能を統合的に働かせながら、環境に適応し、環境を改善するという知的活動を行っています。外界からの刺激を受け、何らかの反応をするまでのメカニズムを、情報処理という観点から理解しようとする学問が認知科学です。この人間の認知プロセスを正しく理解した上で制作した作品は、多くの鑑賞者の感動や共感を生み出します。

本授業では、作品や事例などを紹介しながら、人間の認知プロセスの特徴を解説します。特に、精神障害と認知の関連については、実務者による事例を踏まえた解説をします。

23 次の時代の知識を得る 著作権概論Ⅰ（前期）・Ⅱ（後期）

授業を行う先生：桑野雄一郎
開講時期・時間：前期（Ⅰ）・後期（Ⅱ） 月曜日 2時限

音楽と関わっていく上で著作権法は避けて通れません。音楽作品を創作する人、音楽作品を演奏・歌唱する人、演奏・歌唱された音楽作品を視聴し、それを利用する人、それぞれについて著作権法の定めている様々な権利が密接に関係します。

前期のⅠでは、みなさんにとって身近で、またとても重要な著作権法の概要について解説をします。法律の中でもなかなか複雑でわかりにくく、またファジーな要素が多いのですが、弁護士としての実務経験も踏まえて、事例なども紹介しながら進めていきます。

後期のⅡでは、Ⅰで学んだ著作権法の概要を踏まえて（ただし、Ⅰを履修していることは履修の要件ではありません）、具体的な事案を紹介しながら理解を深めます。実際に紛争になった事例や、炎上騒動になった事例、特に問題にはならなかったが著作権について考えるのによい事例などについて、具体的な題材を提供しながら、解説をしたり、みなさんと一緒に考えたりしながら進めていきます。最新のトピックスでいいものがあれば、それを取り上げることもあります。

適宜、動画や音源などの資料を視聴してもらったり、短い文章を読んでもらったりする予定です。

24

次の時代の知識を得る

メディア・リテラシー

授業を行う先生：宇田川敦史、神谷説子

開講時期・時間：前期 月曜日 4時限

私たちは、LINE や Twitter のようなソーシャルメディア、テレビ、新聞などのマスメディア、さらには身体や都市に至るまで、幾重にも重なるメディア環境の中で生きています。本授業では、そのことが持つ意味合いを意識的、批判的に捉えるための素養としてメディア論、メディア・リテラシーを学びます。

授業では、講義とワークショップを組み合わせ、単なる知識習得ではなく、メディアとコミュニケーション、メディアと芸術表現について多角的・実践的に理解することを目指します。

メディアは、様々な表現を実践する媒体としても、またそれを多くの人に伝達し、共有する媒体としても、とても重要な役割を果たしており、芸術活動とメディア・リテラシーは密接な関係を持ちます。本授業を通じて、メディアとは何か、表現とは何かを一緒に考えていきましょう。

25

次の時代の知識を得る

メディア論Ⅰ（前期）・Ⅱ（後期）

授業を行う先生：若林幹夫

開講時期・時間：前期（Ⅰ）・後期（Ⅱ） 木曜日 2時限

メディアとは人間と人間、人間と社会、人間と世界の関係を媒介する技術的装置です。この授業では、現代の社会や文化とメディアがどのような関係にあるのか、メディアに注目したとき、私たちの社会生活や文化活動、表現領域をどのように理解できるのかを社会的な視点から学び、ともに考えます。

2022年度の授業では「電気の光」をメディアとして捉え、それが20世紀の社会と文化にもたらしたものを、ヴォルフガング・シヴェルプシュの『光と影のドラマトゥルギー』を読みながら考えます。

テキストをともに読み、討論する中から、私たちの日常生活の自明性がメディアと技術にいかに関与しているかを発見してください。

COLUMN 卒業生が綴る藝大教養授業

藝大で受けた一般教養科目の思い出

布施英利 1984年美術学部芸術学科卒業・1989年大学院美術研究科博士課程（美術解剖学専攻）修了・学術博士
学者・美術批評家

藝大に入学したのは、もう40年以上も昔、1980年のことだ。美術学部なので、美術を専門とする授業が多かったが、教養科目にもいろいろな講義があった。

とくに印象深かったのは三木成夫先生の「生物学」で、講義室で、胎児が聞いている体内の音を大きな音量で響かせたり、「人間は星だ!」という意味不明(?)のことを情熱的に話したり、果ては「ウンチを握れ!」などということ力を説いたりしていた。しかし学生には大人気で、授業が終わる時には拍手が湧き上がったりもした。

「文化人類学」の西江雅之先生の講義も思い出深い。服とは何か? 裸とは何か? というテーマで、アフリカの奥地で「服を着ていない裸の部族はいるのか」を調査し、ようやく装飾品すら身につけていない全裸の暮らしをしている人々を見つけたが、彼ら・彼女らはいつも小さな椅子を手に持っていて、誰かと出会うとその椅子に腰掛けてお喋りをする。ある時、その椅子を取り上げたら恥ずかしそうにした。どうやらその椅子が、服の代わりだった。だから人は全て必ず、服（あるいはそれに代わるもの）を着る、と。そんな授業を通して、人間とはどういうものなのか、そういう大切なことを学べた。

藝大で受けた教養の科目は、今でも自分への影響は大きい。芸術の世界というのは、芸術の技術だけを取得すれば済むものではなく、人間やこの世界への理解、さらには宇宙への眼差しまでも自分の中に持たなければいけない。自分は、三木先生が「人間は星だ!」と言った意味を卒業後も考え続け、後に三木成夫論の著作まで書くことになった。

藝大で出会った教養科目の授業は、自分の人生を貫く、芸術探究の大切な軸である。

26

教養を磨く

イタリア文学Ⅰ（前期）・Ⅱ（後期）

授業を行う先生：畑瞬一郎

開講時期・時間：前期（Ⅰ）・後期（Ⅱ） 火曜日 3時限

イタリア文学の歴史の大半は、詩作品によって構成されているといっても過言ではありません。そして20世紀を迎えるまでの詩作品の大半は定型詩なのです。

この授業ではイタリア語で書かれた詩を読み解き、解釈する能力を養うことを目指しつつ、その最初の一步としてイタリア語の韻律（metrica）について学びます。イタリア語の定型詩は、きわめて厳密に音節数によって支配されており、アクセントの配置によって生み出されるリズムを体感することが肝要です。実際、イタリア歌曲には音楽が生み出すリズムと言葉が生み出すリズムが同時存在しているといえます。韻律学がもたらす知的理解と朗読を通して、イタリア語の定型詩を味わってみましょう。

27

教養を磨く

英米文学Ⅰ（前期）・Ⅱ（後期）

授業を行う先生：侘美真理

開講時期・時間：前期（Ⅰ）・後期（Ⅱ） 火曜日 3時限

「英米文学」の授業には目的が二つあります。18～20世紀のイギリス文学に触れ、それぞれの時代の作家が人生や社会をどのように描き、またその世界を「言語テキスト」というかたちでどのように構築したかを知ることです。もう一つの目的は英語の原文・原作に触れてもらうことです。

原文ならではの面白さと、小説としての複雑さを体験してもらいたいと思います。語学の勉強にもなりますが、単語や表現のニュアンスなどテキストを深く読み込むので、文学の読み方の基礎を学ぶこととなります。

2022年度は英国の幽霊・怪奇小説を概観します。幽霊や怪物の表象の変遷をたどり、また小説という虚構における「幽霊」の意義や役割などを考察します。

28

教養を磨く

憲法 ※（前期）（後期）いずれかで履修ができます

授業を行う先生：岡田順太

開講時期・時間：前期・後期ともに 月曜日 2時限

この授業は、日本国憲法の基本原理や内容を概観し、国家の統治組織とその働きについての理解を深めることを目指します。

テキストをもとにした講義が中心ですが、授業内容の確認と理解の定着を目的として小テストを実施したり、予習用の動画を提供したりして、履修者のニーズに応じた学習ができるように配慮しています。

なお、憲法は公務員試験や教員免許取得の必須科目です。授業においては、そうした試験などにおいて要求される水準を確保するために必要な、最低限度の知識の伝授ができるようにも心掛けています。

【参考】昨年度ガイダンス動画 <https://youtu.be/K9KdW19yBV0>

29

教養を磨く

思想史Ⅰ（前期）・Ⅱ（後期）

授業を行う先生：滝沢正之

開講時期・時間：前期（Ⅰ）・後期（Ⅱ） 金曜日 2時限

この授業の目標は三つあります。哲学史（西洋思想史）の基礎的な知識を身につけること、論理的思考力と想像力を身につけること、科学、宗教、芸術などの人間の知的な営みの意味について考えることです。

そこで、この授業では、哲学の歴史から重要な人物を選び出し、原則として1回に一人ずつ、その思想を紹介、検討していきます。

価値ある人生とはどのようなものか？ 時間とは何か？ 神は存在するのか？ 国家はどのような制度で構築されるべきか？

どの哲学者も、こういった哲学の根本問題を徹底的に考え抜いた人ばかりです。先人たちの残した言葉を読み解きつつ、われわれ自身の考えをも深めていくことができると考えています。

30 教養を磨く 社会学

授業を行う先生：土橋臣吾
開講時期・時間：8月 集中講義

社会学はたいへん幅の広い学問ですが、この授業では、ポピュラー音楽を素材としながらメディアの社会学の基礎を学んでいきます。

「音楽をめぐるメディアの変遷」が直接の議論の対象となりますが、それを通じて、メディアというものが文化や社会のかたちにごう作用するのかを理解することが、この授業の主眼となります。そのために、「マスメディアと音楽」「デジタルメディアと音楽」「ソーシャルメディアと音楽」の3セクションに分け、それぞれのセクションの初回で重要な理論や概念について学び、その上で事例の分析を行います。

授業の形式としては、座学が6割、ワークショップ形式が4割というかたちで、動きのある授業を展開するように心掛けています。

31 教養を磨く 宗教学

授業を行う先生：西村明
開講時期・時間：前期 集中講義

「宗教」というと身構えたり、堅苦しく考えたりするかもしれませんが。しかし、宗教学で扱う対象は、キリスト教や仏教などのように「○○教」と呼ばれる輪郭のはっきりした教団や教義にとどまりません。むしろ宗教的ではないような「世俗」の生き方や価値観にも及びます。一見、無関係な「宗教」と「世俗」の関係が、近年ますます注目されるようになっています。

この授業では、そうした「宗教」、「宗教的なもの」と「世俗」をめぐる歴史や現状について、「セカイ」をひとつのキーワードとして迫ってみたいと思います。これらを的確に理解することで、みなさんの表現や思考の営みも、より深く、より鋭くなるはずです。

32 教養を磨く 心理学概説Ⅰ（前期）・Ⅱ（後期）

授業を行う先生：中山遼平
開講時期・時間：前期（Ⅰ）・後期（Ⅱ） 木曜日 2時限

リンゴは赤く見えます。これは、物理学的にリンゴの表面が特定の波長の光を反射し、また生物学的に私たちの目が光の波長に感度を持つためです。しかし、そもそも私たちが感じている「赤」とは何かという疑問が残ります。

あなた自身が感じている「赤」は、他者が感じている「赤」とは違うかもしれません。この疑問は未解明ですが、私たちの脳あるいは心の働きにより生じる内面的なふるまいとその法則を知ることは、好奇心を満たしてくれます。こと心に関しては、将来の予測にも役立つはずで。

この授業では、感覚・知覚・記憶・学習・認識・感情・集団心理など、心理学の主要なトピックに関する知見を歴史的経緯や方法論と結びつけながら体系的に紹介していきます。

33 教養を磨く 生物学Ⅰ（前期）・Ⅱ（後期）

授業を行う先生：伊藤正則
開講時期・時間：前期（Ⅰ）・後期（Ⅱ） 月曜日 5時限

生物の形態・生理を理解し、これらの知識を芸術作品の制作に役立てることが目的です。具体的には、様々な生命現象のうち、身近で興味深いと思われるものを対象にして、その発現メカニズムを基礎的なところから説明します。また、生命現象から疑問点を抽出し、疑問点を論理的に正しい方法で解決することを試みた研究を紹介します。

これらの目的を達成するための方法として、写真や図を用いた授業を行います。生命現象を解析する上での考え方と得られた知識を自身の専門に活かすことを希望します。

34

教養を磨く

ドイツ文学Ⅰ（前期）・Ⅱ（後期）

授業を行う先生：白鳥まや

開講時期・時間：前期（Ⅰ）・後期（Ⅱ） 金曜日 2時限

本授業ではドイツ語圏の作家やドイツ語で書かれた作品の中で重要と思われるものをピックアップし、講義形式で紹介しつつ、中世から現代までのドイツ語圏の文学の歴史やその文化的背景を学びます。

詩や短い作品であれば事前に参加者に読んできてもらい、授業内で感想や解釈について話し合う時間を設けたいと考えています。ドイツ語の知識は必ずしも求めませんので、ドイツ語履修者のみならず、これから学びたい人も歓迎です。文学に興味がある人やドイツ語圏への留学を考えている人に、「ドイツ文学にはこういう作品があるんだ」、「この作品が生まれた背景にはこんな歴史や文化があったんだな」と知ってもらえるような内容にしたいと考えています。

35

教養を磨く

フランス文学Ⅰ（前期）・Ⅱ（後期）

授業を行う先生：大森晋輔

開講時期・時間：前期（Ⅰ）・後期（Ⅱ） 水曜日 3時限

ドビュッシーの友人には作曲家よりも文学者が多かったといわれています。実際、彼が影響を受けた詩人の一覧（ボードレール、ヴェルレーヌ、マラルメなど）をベースにして19世紀後半のフランス文学史の一幕が描けるほど、彼は当時の詩作品に精通していました。

この授業では、ドビュッシーが歌曲に採用した詩を作曲年代順に読んでいくことを通じて、その詩が書かれた歴史的背景、作詩上の約束事、詩の読み方などの基本事項について学びます。同時に、言葉と音、ひいては詩と音楽の関係についても考察していきます。

詩の朗読や歌曲も聴きながら、目からも耳からもフランス詩の世界に親しんでいきましょう。

36

教養を磨く

文化人類学Ⅰ（前期）・Ⅱ（後期）

授業を行う先生：加原奈穂子

開講時期・時間：前期（Ⅰ）・後期（Ⅱ） 金曜日 2時限

本授業では、文化人類学の視点や基本概念、研究方法を紹介するとともに、前期はことば、認識・分類、文字、コミュニケーションを、後期はジェンダー、観光と伝統の創造、多文化の共存といった話題を取り上げます。

文化人類学は、現場でのフィールドワークに基づいて、文化の多様性と普遍性を探究していく点に大きな特色があります。文化人類学の概論的介绍にとどまらず、映像や音声の資料なども踏まえながら、多様な文化の事例や文化が直面している諸問題などについて取り上げていきたいと考えています。

37

教養を磨く

法学（含日本国憲法） ※（前期）（後期）いずれかで履修ができます

授業を行う先生：岩切大地

開講時期・時間：前期・後期ともに 金曜日 5時限

芸術家に法律は関係ない？

確かに一面ではそのとおりかもしれません。シューマンのように、専門的に法を学ぶよりは芸術の道に邁進することがみなさんの使命でしょう。

しかし、他面では、みなさんも社会を構成する一市民であり、またそれ以上に芸術家として社会を先導する使命を負っているのではないのでしょうか。ベートーベンがナポレオンに献呈しなかったのはなぜか、またショパンが祖国の状況をどのように思って「革命」を作曲したか。社会または政治生活の正・不正の問題は、芸術と密接に関係しています。

そこでこの授業では、現在の日本社会あるいは政治共同体の在り方を、主に日本国憲法とその運用を中心に、講義を通して概観します。

38

教養を磨く

歴史Ⅰ（前期）・Ⅱ（後期）

授業を行う先生：草野佳矢子

開講時期・時間：前期（Ⅰ）・後期（Ⅱ） 金曜日 3時限

この授業では、19世紀末から20世紀末までのいわゆる「西洋史」を講義します。

西洋史の知識は、現代のヨーロッパやアメリカ、また過去にその支配下にあった地域で起こっていることやその背景を理解するために必要であり、また芸術作品の鑑賞やみなさんの創作活動にも有用なものであると思います。

授業では、講義内容の理解を深めていただくため、関連する映像やドキュメンタリー番組も視聴します。その際、番組内の説明が講義での説明と多少異なることがあります。講義での説明は、おおむね定説に沿ったものになりますが、歴史像は語り手の立場や史料の解釈などによって異なりうるからです。

講義を聞き、映像を視聴して、疑問を持った事柄について自身で調べてみてください。そのことにより、高校までの暗記中心ではない、歴史を学ぶことの面白さを感じることができるようでしょう。

39

教養を磨く

倫理学Ⅰ（前期）・Ⅱ（後期）

授業を行う先生：櫻井一成

開講時期・時間：前期（Ⅰ）・後期（Ⅱ） 火曜日 2時限

大学の教養科目の「倫理学」の場合、メタ倫理学や規範倫理学の諸問題と諸学説を紹介したり、現代社会が直面している倫理的問題を紹介したりするような授業内容（応用倫理学）が一般的ですが、本授業は「藝大」で行われる倫理学の授業であることを強く意識した内容構成となっています。

倫理を他者との共生やよく生きること（幸福）に関わることがらと理解した上で、我々の美的判断や芸術の諸実践（制作、解釈）が倫理的問題を孕んでいることを指摘し、これを契機として倫理的な思索を深めていきたいと思います。また同時に、生きることの創造的性格についても考えてみるつもりです。

倫理学と美学の交差というのが本授業のキーワードになるでしょう。

COLUMN 卒業生が綴る藝大教養授業

自分の音楽を見つけるために

藤原道山 1995年音楽学部邦楽科卒業・1997年大学院音楽研究科修士課程修了
尺八演奏家・作曲家・音楽学部邦楽科准教授

大学生の頃、教養科目は卒業単位取得のため、仕方なく履修する、最初はそんな思いでした。

1年生のときに、大岡信先生の日本文学を受講していました。当時、新聞連載をされていた有名な先生という認識でしたが、詩歌に対する温かい愛情を感じる授業は本当に本当に楽しくありました。好きなことを語る喜びというものは伝わってくるもので、演奏もそうだなと今になって思います。

あるとき、日本と西洋の文化の違いを語られたことがありました。その話に出会うことによって、私の演奏に対する意識がぐっと深まり、私の活動の根底になっていきました。

そんな先生方が他にも沢山おられました。今にして思うと随分もったいないこと、先生たちに失礼なことをしたと思います。今だったらもっと分かったし、もっと面白く感じることもできただろうなあと。知ることによって音楽がより輝きを増してくる、そんな思いがあります。

みなさん、人生で一番時間のある今こそ、音楽力を高めるのはもちろんですが、自分の世界の外を知ることによって新たな世界とリンクしていくチャンスを作っていきましょう。

出会い、縁、そして知識によって自分の世界はどんどん広がっていきますよ。

40 社会と共創する 音楽アウトリーチⅠ（前期）・Ⅱ（後期）

授業を行う先生：佐野靖

開講時期・時間：前期（Ⅰ）・後期（Ⅱ） 水曜日 3時限

この授業は、講義とアウトリーチの企画・実践から構成されます。

アウトリーチを実践するための基礎的な知識や基本的な考え方を身につけ、コンサートやワークショップ、レクチャーや歌唱・器楽指導などの活動プログラムを構想、展開します。アウトリーチでは、受け入れの諸機関と事前に打ち合わせをし、目的や課題を共有しながら内容を工夫し、さらに事後の反省を次の機会につなげていくというプロセスが重要となります。

キャリア教育の一環にも位置づけられるこの授業では、社会で活躍するゲスト講師から様々な話題や情報を提供していただきます。

41 社会と共創する 音楽教育入門

授業を行う先生：佐野靖、山下薫子、市川恵

開講時期・時間：前期 金曜日 3時限

音楽教育は、学校音楽教育や高度な技能習得を目指すための専門音楽教育に限るものではありません。

幼児教育や障害児教育、あるいは成人を対象とした社会教育や生涯学習などにおいても、音楽活動とその学習は重要な役割を果たしています。そうした広い意味での音楽教育について学び、音楽と人間の多様な関わりを教育的な視点から考えていく授業です。

具体的には、「音楽教育の思想と歴史」、「音楽と発達」、「音楽・言葉・身体」、「音楽の教授・学習過程の実際」、「授業・レッスン研究」などをテーマとして、教員の講義、学生による発表、指導実践を組み合わせながら、音楽教育の意義や基礎的な内容について理解を深めていきます。

42 社会と共創する 音楽療法入門Ⅰ（前期）・Ⅱ（後期）

授業を行う先生：重田絵美

開講時期・時間：前期（Ⅰ）・後期（Ⅱ） 木曜日 4時限

音楽は、人間に生理的、心理的、社会的な様々な影響をもたらします。音楽療法は、疾病や障害を持つ人々がより豊かに生きられるよう、音楽が人に与える働きを活用していきます。医療や社会福祉、地域社会などの領域にわたる実践例からは、様々な心身の問題を抱える人にとって音楽がどのような意味を持っているかを学ぶことができます。

みなさんが音楽を聴き手にどう届けていくのか、また社会において音楽がどのような可能性を持つかを考えていくことにもつながっていくでしょう。

この授業では、音や音楽の機能、音楽療法についての基礎的な知識や方法論、児童領域・精神科領域・高齢者領域などの幅広い実践についてわかりやすく紹介していきます。

43 社会と共創する 音楽療法概論Ⅰ（前期）・Ⅱ（後期）

授業を行う先生：今野貴子

開講時期・時間：前期（Ⅰ）・後期（Ⅱ） 金曜日 2時限

みなさんの音楽の専門性は、これから社会の中でどのように生かしていけるのでしょうか？

音楽療法の理論と技術には、乳幼児から高齢者に至る幅広い年齢層に対して、様々な病気や障害、環境や文化を持つ対象者に寄り添いながら、医療福祉施設、学校、コンサートホールなど多様な現場で音楽を提供するためのヒントが詰まっています。

この授業では、音楽療法の基礎的な理論や国内の音楽療法現場の現状を理解した上で、みなさんの演奏技術や専門性を生かしながら、多様な対象者、現場に音楽を届けるために必要な知識や技術について学んでいきます。高齢者、障害児者、親子を対象としたコンサートを想定して、音楽や楽器を通して対象者と関わる技術や、プログラミング、企画運営のコツについても扱う予定です。

44 社会と共創する 芸術と社会 21世紀の社会が求める創造性とは(企業編)

授業を行う先生：熊倉純子
開講時期・時間：前期 集中講義

昨今、世界的に企業の芸術に対する注目度が著しく上がっています。

しかし、企業が求める「創造性」とは、どのようなものなのでしょうか。はたして、今日の藝大生の創造性は日本企業の求めるものにマッチするのでしょうか。

本授業は、複数の日本企業の様々な部署で働く第一線の人々を講師に迎え、藝大の様々な学科・専攻から集まった学生とワークショップ形式で対話を試みるものです。学生は、参加企業から出される課題を選び、グループワークを通じて解答となる具体的プランを考え、提案を行います。

授業を通じて、まずは「社会に媚びずに発想する」力を養い、それを「伝える」方策を模索する経験値を培うことを目指します。

45 社会と共創する 芸術文化環境論Ⅰ(前期)・Ⅱ(後期)

授業を行う先生：伊志嶺絵里子
開講時期・時間：前期(Ⅰ)・後期(Ⅱ) 木曜日 3時限

「芸術文化は不要不急なものでしょうか?」。

大学で芸術的スキルを身につけているアーティストやアート・マネージャーたちが、この問いに自信を持って答えられるためには、芸術文化が置かれている環境の観点から深く考察することが必須です。

国や地方自治体、企業、アート NPO などは芸術団体に対して、何を目的にどのような支援をしているのでしょうか? そして、芸術あるいはアーティスト自身は人や地域社会に対してどのような影響をもたらしているのでしょうか?

本授業では、国内外の芸術政策(国・地方自治体)や様々なセクターによる芸術支援制度および地域社会で展開される様々な芸術活動の事例を紹介し、その意義や価値を多角的に検証していきます。

46 社会と共創する 「障がいとアーツ」研究

授業を行う先生：高橋幸代、楠田健太
開講時期・時間：通年 水曜日 4時限

多様性が重視される現代において、芸術の果たすべき役割とは何でしょうか。

障がいのある人と芸術との関わり、彼らの表現から学ぶことを通して、創造的な視点で芸術の新たな価値を創出し、すべての人が「共に生きる」社会の実現を目指します。

特別支援学校や福祉施設でのワークショップ、障がいのあるアーティストとのコラボレーションなど、様々な出会いの中で受講生自らが主体的に考えて企画し、分野を超えて協力し実現していく授業です。

また、視覚障がい者のアテンドや手話通訳の講習や実践、ゲスト講師を招いた特別支援学校における芸術教育や国内外のインクルーシブアーツなどについての講義など、誰もが等しく芸術を享受し表現できる環境づくりについて考えます。

47 社会と共創する 芸術情報概論A(前期)・B(後期)

授業を行う先生：苅宿俊文、中尾根美沙子、井上愉可里、望月玲奈
開講時期・時間：前期(A)・後期(B) 金曜日 5時限

教育現場はもちろん、社会でアートを活用したワークショップが求められています。そのワークショップの理論と実践が学べる授業です。

ワークショップの作り手として意味と仕組みを説明できることや、ワークショップを実際に作る際の基本的な手順などを提供します。

ワークショップを実際に企画・運営することを想定している人や、学校の授業でワークショップ型の授業を多く取り入れたいと思っている教職志望の人にも役に立つ授業なので、自分でやることを想定しながら受講すると大きな成果が上がります。

DOOR「アート×福祉」をテーマに社会人と一緒に学ぶプログラム

「Diversity on the Arts Project」(通称: DOOR) は、「アート×福祉」をテーマに、「多様な人々が共生できる社会」を支える人材を育成するプロジェクト型の授業です。

講師として現代の社会に生きづらさを感じている当事者、社会との関わりを持ち、表現を行うアーティスト、現代の福祉をより広い視野で捉え直す多様な分野の専門家を迎え、開講します。

※本授業は、美術学部の学生が対象となります。

48-1 ARTs × SDGs プラクティス

開講時期・時間: 通年 開講日時はシラバスを参照してください

芸術・表現・ケアをより広い視点で捉え直すための授業です。「芸術とSDGs」をテーマに据え、持続可能な社会を考える上での課題を見つけ出し、福祉とアートが重なる領域を創造的に構築していくことを目指します。

48-2 ダイバーシティ実践論 ※ケア原論と一緒に履修が必要

開講時期・時間: 通年 月曜日 18:20～19:50 ほか

実際に生きづらさを抱えている当事者や、当事者と関わりながら活動を行っている実践者・表現者との対話や、現代の福祉をより広い視点で捉え直す様々な領域の専門家を講師に迎えて、オムニバス形式の講義を行います。これからの社会で創造されるべき共生社会を考察し、実践につながる思考を編んでいくことを目指します。

48-3 ケア原論 ※ダイバーシティ実践論と一緒に履修が必要

開講時期・時間: 通年 月曜日 18:20～19:50 ほか

福祉の歴史やケアの基礎的な考えを知り、私たちを取り巻く環境が抱える問題について理解を深めます。また、福祉とアートの両領域における創造的な取り組みを参照することで、現代の福祉とアートの接点について考えます。アートを介し、福祉をより多角的な視点で捉えて行くことを目的としています。

48-4 プログラム実践演習

開講時期・時間: 通年 土曜日もしくは日曜日 不定時

多様な人々がともに過ごす場を作るワークショップなどを考案し、実践します。また、社会の中で見過ごされがちな事象に目を向けてきたアーティストの眼差しに触れ、学びを深めます。

48-5 ケア実践場面分析演習

開講時期・時間: 通年 土曜日もしくは日曜日 不定時

実際の福祉の現場へ足を運びグループワークなどで共働しながら、ケアの現場をより社会に開かれた場とする方法を考察します。福祉の現場に、自らの活動を作り出すための実習です。

48-6 ドキュメンタリー映像演習

開講時期・時間: 通年 主に土曜日もしくは日曜日ほか 不定時

映像制作・ドキュメンタリー技法を基礎から学ぶことで、映像制作に触れることが初めての学生でも、基本的な映像メディアを扱えることを目標とします。テーマに沿って、グループで映像制作をし、授業の最終には上映会を行います。

48-7 美術鑑賞実践演習

開講時期・時間: 7月～2月 月曜日(6日間) 不定時

複数の人との対話を通じて作品を味わい、作品やモノを介して人がつながる場をデザインするプロセスを学びます。対話を生み、自由な発想で、主体的に見る鑑賞の場づくりについて、講義と実践を通じて考えます。

48-8 アクセシビリティデザイン基礎

開講時期・時間: 7月～2月 日曜日(8日間) 不定時

障害を持つ当事者や社会的弱者の支援に取り組む組織・専門家を招き、人々がアートを介して多様な価値にアクセスできる環境について学びます。

48-9 人間形成学総論

開講時期・時間: 夏季 主に土曜日もしくは日曜日ほか(4日間) 不定時

人間の性質や能力を育て形成する「教育」について考えます。現代社会の教育と学びの問題から出発し、人間形成の基本原則について学び、一生涯を通じた学びの基礎的理解を身につけます。

48-10 アートプロジェクト実践論

開講時期・時間: 夏季 主に土曜日もしくは日曜日ほか(4日間) 不定時

いま、全国各地で様々なアートプロジェクトが展開されていますが、今後のアートプロジェクトはどのような方向性を持って進んでいくべきかという問いについて、実践的立場から検証と考察を行います。

49 社会と共創する

日本の芸術・文化を英語で学ぶ

Introduction to Japanese Arts and Culture

※（前期）（後期）いずれかで履修ができます

授業を行う先生：岡本美津子 ほか

開講時期・時間：前期・後期ともに 水曜日 3時限

「浮世絵って何?」。日本文化に馴染みのない海外の人から英語でそう尋ねられたら、あなたはへと答えますか？

浮世絵はそのまま Ukiyo-e ですが、その歴史や特徴、魅力をどれくらい英語で伝えられるでしょうか？

この授業では、日本で発展してきた美術、音楽、映像芸術の中から4分野について、英語で理解することを目指します。何となく知っていたもりの日本の文化も、英語、そしてグローバルな文脈で捉え直すことで、様々な発見があるはずです。日本語サポートもありますので、国際的な活動に関心がある方は、ぜひ挑戦してください。

2022年度の前期は工芸、版画、アニメーション、邦楽（伝統芸能）を扱う予定です。後期についてはシラバスを参照してください。

COLUMN 卒業生が綴る藝大教養授業

後悔している授業

坂東祐大 2013年音楽学部作曲科卒業・2015年大学院音楽研究科修士課程修了
作曲家・音楽家

卒業してから初めてシラバスを読み返しているのですが、改めて「この授業受けてみたい!」とってしまう授業ばかりで、ついついもう一度学生生活をやり直したい気持ちに駆られてしまいます。

自分が学生時代に受けた講義の中で一つ後悔している教養の授業があります。

記憶が確かであれば夏に行われた「社会学」の5日間にわたる集中講義だったと思うのですが、初日に大きな刺激を受け興奮したものの、翌日まさかの体調不良に見舞われ、その後、最終日まで講義を受けることができませんでした。

その後も学びたい意欲だけはあり、本屋に立ち寄ると罪滅ぼしのように社会学の関連の本をついに取ってしまいます。(ただこれも悲しいことに、その学問の基礎がないとなかなか歯が立たない本ばかりで、積読の棚に放置されたままになってしまうことも多いのですが……。)

芸術を学んだ者がその本質を社会に伝えるには、それぞれの専門の技術だけでなく、広範囲な「引き出し」が必要です。学生時代というのはその「引き出し」を、一番上質な方法で増やすことのできる時期だと思います。

その瞬間は役に立たないと思ったことでも、いつかどこかで何かのきっかけになることがたくさんあります。

それは、決してネット上の情報だけでは得られない貴重なことだと、改めて感じています。

50 デジタルの表現をみにつける イメージ演習A

授業を行う先生：早川翔人
開講時期・時間：前期 水曜日 4・5時限

本学の取り組みである「東京藝大デジタルツイン」に伴い、芸術情報センターに導入された最新機器について、演習形式で学んでいきます。

具体的には、3D スキャナ、3D カメラといった動画配信スタジオの機材を、実習を通じて体験していきます。学生のみなさんには、制作した作品を発表する機会も設けます。

授業は、芸術情報センター演習室にて対面で行われます。抽選申し込み方法は初回授業に行うので、希望者は必ず出席するようにしてください。

51 デジタルの表現をみにつける イメージ演習B

授業を行う先生：小塚直斗、柳川智之
開講時期・時間：後期 火曜日 4・5時限

デジタル技術の台頭により、イメージを手に入れることはとても容易い時代になりました。また同時に、イメージをアウトプットする方法は、物質ではなく多くは「ディスプレイ」に取って代われようとしています。

この時代において、デジタルイメージを物質化することの意味を考え、その中で写真や絵画などのイメージを扱い作品を作ることの意義と、実践的な表現手法を摸索することの実践を伴った演習を行います。

以前からあるアナログプロセスから始まり、デジタル技術を駆使したものなど、多彩な表現を摸索し、最終的には作品を制作し、学内にて展示発表します。

52 デジタルの表現をみにつける インタラクティブ・ミュージックI

授業を行う先生：仲井朋子
開講時期・時間：前期 木曜日 3時限

デジタル・メディアを活用し、サウンドを作品の要素とする制作に取り組みます。また、実際の作品制作・発表を通じて、メディアにおける「音」の役割について考えることができます。

授業では、DAW ソフトである Logic Pro などを使用します。

抽選申し込み方法については、初回授業にて行いますので、希望者は必ず出席するようにしてください。

53 デジタルの表現をみにつける 映像演習I 映画

授業を行う先生：長尾寛幸、加藤直輝
開講時期・時間：前期 火曜日 5時限

現在のあらゆる芸術表現において、映像は「芸術の記録装置」という存在を超えて、「芸術表現の一部」としても、あるいは「芸術表現そのもの」としての役割をも果たすようになりました。

この授業では「20世紀の映像表現」を牽引した「映画の制作手法」を学ぶことから、「21世紀の映像表現の可能性」を考えていきます。

授業内容は、

- ・ゲスト講師による「映画の制作手法」についての講義（監督、脚本、撮影照明、美術、編集、サウンドデザインについて）
- ・芸術情報センター所有のカメラ、編集ソフト（Adobe Premiere）を使った演習を二本柱とし、最終的に数分間の短編映画制作を行うことで、映像制作の実践的知識と技術の習得を目指します。

54 デジタルの表現をみにつける 芸術情報演習Ⅰ

授業を行う先生：松川祐子
開講時期・時間：前期 水曜日 3時限

Adobe InDesign による、紙メディアの制作演習です。

ソフトの使い方、文字組や画像加工、印刷物の構造、印刷の知識など、一連の知識と技術を習得し、紙メディアとして情報をまとめたり伝えたりしたいときにどのようにまとめるかを検討し、制作できるようになることを目指します。

授業では、基礎知識の講義とハンズオンで制作の基礎を身につけ、その応用として、最終課題の冊子制作を行います。その制作を通して、テーマ設定・コンテンツ制作・レイアウト・出力・製本まで経験してもらいます。

それぞれの創作活動に必要なツール（名刺やDM、ポートフォリオなど）が適切に制作できるようになることで、みなさんの活動の幅が広がることを願います。

55 デジタルの表現をみにつける 芸術情報演習Ⅱ

授業を行う先生：加藤大直
開講時期・時間：前期 火曜日 3時限

ビジュアル表現、アニメーション、プロダクト開発、建築に至るまで幅広く扱われている3D技術を習得します。

どの分野にも対応できるよう、前半部では3Dの基礎概念と技術を学び、後半では各分野に分けた技法の習得、制作を開始します。

主だった使用ソフトはFusion 360とMayaですが、各受講生によってソフトウェアをプラスする場合もあり、昨今の様々なCAD、3Dモデルソフトに対応できるように授業になります。

3Dの基礎から始め、最終的に製品プロトタイプまたはメディアに実装できるレベルまで習得します。

56 デジタルの表現をみにつける ゲーム制作演習1（前期）・2（後期）

授業を行う先生：桐山孝司、岡本美津子、薄羽涼彌、上平晃代
開講時期・時間：前期（1）・後期（2）月曜日 5時限

ゲームの制作を通して、芸術としてのゲームについて考察します。

制作環境としてUnityを用いますが、順を追って進めていくので予備知識がなくても履修可能です。

前期授業「ゲーム制作演習1」では、身近にあるものの動きや仕組みを観察することからヒントを得て、ゲーム制作につなげていきます。後期授業「ゲーム制作演習2」では、前期に行われる「ゲーム制作演習1」と同様に制作環境としてUnityを用いますが、AR/VRやセンサーなども活用してゲーム制作につなげていきます。

学生のみなさんには、前・後期ともに、制作したゲームを発表する機会も設けます。前期授業「ゲーム制作演習1」を履修していなくても、後期授業「ゲーム制作演習2」のみの履修もできます。

57 デジタルの表現をみにつける コードとデザイン

授業を行う先生：鈴木太郎、渡邊淳司、大谷智子、田部井勝彦
開講時期・時間：前期 金曜日 4・5時限

本授業の目的は、創作や研究活動の基盤となる技術の習得および感覚デザインに関する基礎原理を身につけることです。

テクノロジーを使用した表現・コミュニケーションのための技術に加え、Arduinoを使った光の制御と素材感の体系的な理解、錯視を利用した視覚デザインや、レーザーカッターを使用した触感デザインといった、感覚デザインに関する基礎原理を、演習形式で体験的に学びます。

表現に使用されるテクノロジーによって生み出された物体・体験の質感（光、立体、触テクスチャなど）を体系的に分析し、表現の基盤にある感覚原理をより深く理解し、テクノロジーを用いた表現の視野を広げる契機となることを期待します。

授業では、芸術情報センター内の大型機材を利用します。

58

デジタルの表現をみにつける

デジタル・サウンド演習

授業を行う先生：仲井朋子

開講時期・時間：後期 木曜日 3・4時限

本授業では、音楽シーンにコンピューターが導入されて以降の音楽表現と制作技術について理解を深め、音楽作品のみならず、サウンド・アート、オーディオ・ビジュアル作品、マルチメディア作品などに応用する音声信号処理プログラミングの基礎を学びます。

作品制作には、音楽／映像／マルチメディア用の統合開発環境である Max 8 などを使用します。

抽選申し込み方法については、初回授業にて行いますので、希望者は必ず出席するようにしてください。

59

デジタルの表現をみにつける

メディアアート・プログラミングⅠ（前期）・Ⅱ（後期）

授業を行う先生：田所淳、森山朋絵

開講時期・時間：前期（Ⅰ）・後期（Ⅱ） 金曜日 3・4時限（前期）・3時限（後期）

この授業では「クリエイティブ・コーディング」について学び、制作を行なっていきます。

クリエイティブ・コーディングとは、何かの機能を実現するのではなく、創造的に表現を行うことを目的としたコンピュータプログラミングです。生成的なデザイン、VR、AR、サウンドアート、プロジェクションマッピングなど、その応用分野は多岐にわたります。

授業内でプログラミングの方法や考え方について説明を行い、その内容をもとに制作を行っていきます。前期では p5.js というプログラミング環境を用います。

プログラミング経験のない方でも受講可能です。

藝大リベラルアーツ（教養科目）ガイド 2022

GEIDAI LIBERAL ARTS GUIDE 2022

令和4年（2022年）3月31日

発行者：東京藝術大学教養教育センター

東京都台東区上野公園1-2-8

編集：岡田智博 東京藝術大学教養教育センター

デザイン：木下真彩

校正：阿部謙一

© 2022 Liberal Arts Center, Tokyo University of the Arts

本ガイドで掲載した各科目の履修内容の詳細については、大学 WEB サイト上にあるシラバスを参照してください。

東京藝術大学
教養教育センター



TOKYO GEIDAI
LIBERAL ARTS CENTER